

身近な音問題への情報提供、「会員の頁」の項、スタートについて

社団法人日本音響材料協会
理事長 静永秀宏

当協会は正会員、研究賛助会員、産学の研究者並びに購読会員の皆様から深いご理解とご支援をいただき、設立以来58年の長きに亘り、公益法人として音響にかかわる事業を着実に進めて来ることができました。ここに関係各位に心よりの感謝を申し上げます。

一方、社会からの要請も変化し、平成20年に公益法人法が改正、施行され、当協会もこれまでの良き伝統を守りつつ時代に対応した新しい公益目的事業の推進を目指し、一般社団法人への移行認可作業を平成22年度事業として進めているところでもあります。新しい法人が求められているものは、幅広い社会への貢献と堅実な事業運営です。

そこで、当協会は、まず主要事業である機関誌発刊事業の一層の充実により購読者の皆様のご期待に応えていくべく、国内第一線の研究者でもある編集委員の皆様と共に一丸となって、最新の情報源としての「音響技術」のご提供に邁進してまいりたいと考えております。そして、それに付加して、この度、“身近な音問題への情報提供の場”として機関誌「音響技術」に新しい企画、「会員の頁」の項(約6ページ)を本号(平成22年12月発刊、152号)より進めてまいります。

当協会の事業は、音響材料メーカー、音響エンジニアリング会社や音響設備施工会社等がサポートし、国内屈指の大学、建設会社や音響研究機関の研究者の研究成果の展開がバックボーンとなっております。特に機関誌「音響技術」は実用性・具体性・平易性を重視した専門誌として音響研究者、実務者から学生までに利用頂いているところです。

一方、幅広い一般ユーザーの皆様に対する情報提供や音響材料そのものに加えてそれらに裏付けられた日々の施工技術開発の状況等についての解りやすい説明、情報提供などは必ずしも十分ではなかったとの反省もあります。

そこで購読者の皆様や直接のお客様の声をお聞きしつつ対応する事案の紹介や、メーカーや音響設備施工者等の開発、製造、施工、販売の現場で培ってきた隠れた貴重なノウハウや商品を使用するに当たっての大事なポイント等を披歴させて頂きつつ種々の情報提供の企画を進めてまいりたいと考えているところです。

つまり新企画、「会員の頁」の項は、音に興味のある一般消費者、一般ユーザーの皆様にも気楽に読んで頂ける内容とし、解りやすい音の知識に関する情報、音響材料自体、施工の技術等の紹介稿も付加してまいりたいと考えております。

近年、一般居住者からの音にかかわるトラブル、紛争、訴訟など音環境の新たな問題が提起されています。その中でも住宅については切実な問題が多いものの解決されていない課題も多くあります。集合住宅については、いろいろな研究がなされ、当協会でも主要な特集テーマとしてきており、解決の為に多くの技術紹介をしてまいりました。一方、戸建住宅においてはエコ住宅指向から高气密化工法でエネルギー問題は良化されているものの、逆に音の問題は悪化、トラブル件数も増加していることが見逃されている面があります。生活時間の半分以上を過ごす居住空間であり、家族同士が主体とはいえ、戸建住宅においても各居室の音環境の改善に目が向けられるべきと考えております。外部騒音、床鳴り、上下階からの生活音、楽器の演奏音などが問題提起されており、それらについても平易なテーマを設定しての情報提供をしていくものです。

また、日頃、会員メーカーや音響施工関係者が仕事の中で遭遇している“お客様の困りごと”や“相談ごと”などについては、整理しての情報のご提供。そして音にかかわる材料の基礎知識や音響材料商品の正しい使い方のご紹介。

さらに購読者の皆様からのご質問やご意見を頂きつ

身近な音問題への情報提供, 「会員の頁」の項, スタートについて

つお答えしていくQ&Aを取り入れてまいりたいと考えております。「会員の頁」は購読会員の皆様の方でもありますので積極的な参加, 質問投稿を期待しております。

「会員の頁」の項は, 音に興味のある幅広い皆様へ, 解りやすい技術情報提供を目指すもので,

- (1) “コーヒープ レーク”的に, 音に関する話題, 情報の提供
- (2) 日常, 遭遇している問題を捉えての“音のQ&A”
- (3) 戸建て住宅の音の問題点に関する技術情報の提供
- (4) 音響材料の解りやすい技術情報の提供
- (5) カタログに載せていない技術事項の説明

(6) 製品の正しい使い方の紹介

以上のような企画で進めてまいりたいと考えております。

機関誌「音響技術」の本体稿は従来通り, 学会の学術誌と一般誌との中間の位置付けで, 実用性・具体性・平易性を重視した専門誌として, 実務的に利用頂くとともに音響技術者育成にも貢献できる内容として充実を図ってまいります。

そして新たな企画の中では, 購読者の皆様からの直接の声を機関誌「音響技術」へ反映をさせることができ, 身近に起きている音問題を購読者の皆様と共に考えて解決していく場となれば幸いです。